

査が行われた。その結果、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器などのほか、平安時代後期以降の屋瓦片が多数出土した。遺構としては、

柱穴・井戸・小溝のほか調査地南端では、ロストル式の瓦窯も二基

検出され、寺院跡であることが確認された。木簡が出土したのは、

杉と思われる針葉樹の板を組み合せた円形の井戸からである。こ

の井戸は、板と板とを接合するのに竹の目釘が使われている。井戸

内からは中・近世の屋瓦類や牛のツメ切りに使用されたと思われる

小型鎌が出土している。

## 8 木簡の釦文・内容

(1)   
 (穿孔)   
 「○ [泉錦 カ] X

(108)×38×4 019

・「○ [泉錦 カ] X  
(穿孔)

材質は針葉樹である。上部に小孔が穿たれていることから、付札

のようないかと考へられる。「泉錦」が何を意味するのか明らかでない。

## 9 関係文献

大阪府立泉州考古資料館『記された世界』(一九八四年)

(近藤利由)

# 大阪・穂積遺跡

ほづみ

1 所在地 大阪府豊中市服部南町

2 調査期間 一九八五年(昭60)七月～八月

3 発掘機関 豊中市教育委員会

4 調査担当者 田上雅則

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生時代後期～室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

穂積遺跡は、猪名川、天竺川、神崎川などの大小河川によって形成された沖積平野に立地する、弥生時代後期から室町時代に亘る複

合遺跡である。周辺には勝

部遺跡、田能遺跡、庄内遺

跡など学史的にも著名な遺

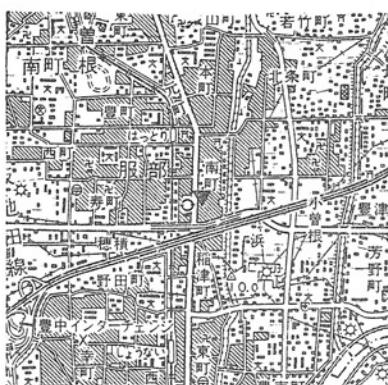
跡が点在し、また、大阪府

指定史跡の春日大社南郷目

代今西氏屋敷に所蔵される

『今西家文書』より、摂関

家領垂水西牧樺坂郷に含まれる事が判明しており、考



(大阪西北部)

37

古学と文献とを対比する上でも、非常に注目されるところである。

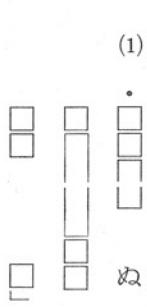
当遺跡は、昭和初年に地元の住民によって発見され、戦前には弥

生時代後期の土器を、この遺跡名に因んで「穂積式」と称し、畿内の後期弥生土器を指すものとして広く使用されたことから、学界でも著名な遺跡となつた。しかし発見以来本格的な調査もされず、遺跡の実体が不明のまま五〇年余りも経過した。

近年に至つて、数回の調査が実施され、弥生時代から古墳時代前期の良好な一括出土土器群や、桜井谷編年II-2の須恵器を伴う径一八mの削平された円墳、鎌倉時代の掘立柱住居跡、井戸、条里制の坪境と考えられる溝を検出している。

一九八五年、マンション建設に伴う調査において、鎌倉時代の曲物を転用した井戸、掘立柱住居跡、溝を検出した。溝は東西に走行し、幅二m、深さ五〇cmを測り、堆積埋土より流水路と考えられるものである。木筒はこの溝より出土し、一四世紀初頭に比定される瓦器碗、土師器皿が共伴した。

## 8 木筒の积文・内容



・  
□□□  
□□□  
□□  
」 (横書)

(60)×(20)×2 081

上部、側辺を欠損している。判読できる文字は「ぬ」だけであるが、左右の最初の字形が類似しているため、同じ文章が数行記されているものと推定される。尚、裏面にも墨の痕跡が認められるが、文字であるか否かは判断できない。

(田上雅則)

